

鑿金

(のみ)

金鶴泳



金 鶴 泳	鑿 金 (のみ)
-------------	----------------

文藝春秋

鑒(のみ)

昭和五十三年九月十五日 第一刷

定価千二百円

著者 金 鶴 泳

発行者 檉 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三

電話(三)二六五一一二一

本文印刷 理想社印刷

付物印刷 凸版印刷

製本所 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

金鶴泳(きんかくえい)
昭和十三年群馬県に生れる。
東京大学工学部工業化学科
卒業の後、四十三年、東京
大学大学院博士課程中退。
現在、統一日報輪説委員。
「凍える口」で四十一年度
文藝賞。「石の道」「夏の亀
裂」「冬の光」が、第七十回、
七十一回、七十六回芥川賞
候補となる。

目次

あぶら蟬

月食

冬の光

鑿（のみ）

7

55

113

173

裝釘
坂田政則

鑿
(のみ)

あぶら
蟬

「質問があるのですが」会場を出たときひとりの青年が声をかけてきた。瘦身の背の高い青年で、ダークグレーのスーツを身につけ、白いワイシャツにグリーンのネクタイを締めていた。「何でしょうか」啓子は不意に声をかけられ、少しぼんやりした顔で青年を見つめた。青年のグリーンのネクタイが、窓に射している冬の午後の光の中で冴え、妙に目に沁みた。「質問というより、少しあなたの研究についてお伺いしたいのです。多くの研究とも関連があるものですから」「あなたの？」自分の報告に何か異議でもあるのだろうか、啓子は一瞬身構えるような気持ちになった。いつだったか専門雑誌に発表した自分の研究について、ある会社の研究所から特許権の侵害ではないかと抗議を受けたことがあり、そのときは使用触媒と反応行程の違いを説明して、侵害にはあたらないと結着がつけられたが、そんなことがあってからというもの啓子は特にそういうことには神経を使っていた。青年に呼びとめられたのはドア口で、会場からぞろぞろと人が出ていた。神田のG会館の二階であった。その日、そこで高分子関係の小さな学会が開かれ、仙台の大学の大学院で高分子化学を専攻している啓子は、研究室の主任教授の勧めで研究発表すること

になり、今朝方上京して、卒業論文いらい手がけてきた研究の一部を報告したのだった。それは吸水性を持つポリエステル系合成繊維の合成を目的にした研究だった。彼女はその研究によって富山の大学を卒業し、去年の春仙台の大学院に進んだのであった。「どういうことでしょうか」啓子は髪を掻き上げながらいった。「ここでは何ですから、一階の喫茶室で……」と青年は赤い絨毯の敷かれた廊下を啓子に背を向けて歩き出した。彼女はそのままに青年について行った。一階に降りると廊下の窓から中庭が見え、枯れ芝が明るく光っていた。庭の隅の塀際に白や赤など、色とりどりのシクラメンが一行に咲いていて、そのあたりだけがひときわ華やかだった。中庭に臨んだ喫茶室に入ってみると、発表会場から降りてきた人たちではば満員だった。いくつもの話し声が賑やかに行き交い、そのあいだをレコードの音楽が低く流れていた。青年は入口に立って室内を見まわした。奥の窓際に小さなテーブルをはさんで椅子が二つ向かい合っている空席を辛うじて見つけ、二人はそこに行って坐った。席のすぐ脇が窓になっており、その先が中庭であつた。「水酸基が反撥される原因のことなんです」青年は啓子に飲み物の注文をたずねたあと、やってきたボーイにコーヒーを二つ注文し、早速用件を切り出した。「あなたはそれを電子論で説明していましたが、ちょっとそこがわからないのです」高分子鎖中の至るところについているある官能基が、本来なら水分子と親和する要素を持つ水酸基（OH基）を引きつけてしかるべきなのに、啓子の合成したポリマー（高分子物質）は、反対に水酸基を反撥する傾向が見られた。そうした現象が起こる原因について、啓子は、その官能基が官能基自身の末端原子に対して、プラスI効果、すなわち電子吸引性を持っているために、末端原子のエレクトロンが官能基本体に吸わ

れ、それによって水酸基を引きつけるに足る力を失っているせいであるとした。青年はそのことについていつてきたのだった。「わからないといいますと？」啓子は青年の質問というのが、自分の報告に対する抗議めいたものではなく、実験データの解釈についての疑問であることに少しほっとするものを感じながらき返した。「つまり、あれは電子論的な問題ではなく、官能基に隣接しているベンゼン環の立体障害によるものではないかとぼくは思うんですがね」青年は煙草に火をつけていった。そのことについては啓子も考えた。それを確かめるために、彼女は、ベンゼン環を、それよりもさらに大きな立体障害を及ぼすと考えられるトリル基で置換したものについて吸水率を調べたところ、ほんのわずか吸水率の低下が見られたものの、それは測定誤差範囲内の、立体障害のせいだと断定することもできぬ程度のもので、そこで彼女はこれはやはり官能基本体の電子吸引効果によるものであらうと推定したのであった。彼女はそのことを青年に説明した。紙袋の中からノートを取り出し、ベンゼン環のかわりに、いくつかの異なった官能基を持つトリル基で置換した実験データを示しつつ、自分の推論の根拠を説明した。「なるほど、そうですか」青年は応えながらもどこか釈然としない様子だった。そして、首をかしげ、「あの官能基に、それほどどのエレクトロン効果があるとは意外ですね」といって庭に目をやった。眼鏡が庭の光を反射して光っていた。そのときボーイがコーヒーを運んできた。啓子はノートを紙袋に納め、「あなたも同じようなことをなさっているんですか」とたずねた。すると、コーヒーに砂糖を入れていた青年は、「そうそう、自己紹介もしないで失礼しました。ぼくはこういう者です」と名刺を差し出した。名刺には肩書と、「金雅実」という名前、それに三鷹の住所が記されていた。T大

学の大学院学生だった。「修士課程ですか、博士課程ですか」「博士課程です」青年は答えてからコーヒーをひと口飲み、「N先生の研究室にいらんですが、あなたと同じようなことをやっています。プログラムのあなたの講演題目を見たとき、正直のところ冷やっとしましたよ。先を越されたかなと思いました。出発物質がまったく違っていたので、ちょっと安心しましたが……。それにしても、皆結構同じようなところに目をつけるものですね」と青年ははじめて顔に笑いを浮かべた。啓子はしばらく名刺を見ていた。「失礼ですけど、きんさん、とお呼びするんですか?」「そうです」「朝鮮のかたですか?」「ええ」そして青年は煙草の灰を灰皿に落として口に戻し、また庭を見やった。啓子は青年の横顔を見つめた。青年は煙草を指を使わずに、ゆっくりと吸っていた。椅子の肘においた手がだるそうに垂れ、疲れているような虚ろな表情が顔に漂っていた。「私の中学のとき、同じクラスにやはり金さんという人がいましたわ。もっともその人は学校では金山という名字を使っていましたけれど」そして啓子は金山京子のことをちょっと思い出した。金山京子は、引っ込み思案な、教室にいてもまったく目立たぬ生徒だった。町はずれの南町の土堤際に、朝鮮人ばかりが十世帯ほど住んでいる一角があり、彼女の父親はそこで屑屋をしていた。啓子の内部で金山京子は、無口で陰気な生徒として記憶に残っていた。ある日の歴史の時間に、「朝鮮」という言葉が出てきたことがあった。そのとき、何人かの男の生徒がしきりに金山京子の方を振り返ったのだが、啓子をはじめ、なぜ彼らが金山京子の方を振り返るのかわからなかった。そしてすぐに、金山京子があつた南町の土堤際に住んでいることを思い出し、彼女が朝鮮人なので皆が振り返っているのだと気がついた。それまでの啓子は、金山京子が朝鮮人であるとかな

いとか、そういったことについて考えたことがなかった。貧相な身なりをした目立たぬ生徒だと思つたぐらいで、ほとんど関心がなかった。その歴史の時間らしい、金山京子が朝鮮人であるというところが彼女の中に何となく印象づけられた形になったのだが、そのときの金山京子が痛々しいほど顔を赤くし、じっと目を伏せていたので、貧相な身なりと相俟つて金山京子是一種暗い生徒として啓子の中に刻印づけられた。そして、いつしかその暗い印象は、金山京子だけでなく、朝鮮人一般の印象として固定して行つたのだが、いま目の前にいる青年はそうした印象からはどこかはずれている感じだった。「私のクラスばかりでなく、同じ学年に四人も朝鮮のひとがいましたわ」と啓子はつけ加えた。すると青年は、庭から目を離して啓子に顔を向け、「そうですか」とちょっと冷ややかな口調でいった。それがどうかしましたか、といっているようだった。青年の不愛想な反応に、啓子は訳もなく顔を赧らめ、青年から目をそらし膝の上に視線を落とした。そのとき、それまで周囲のざわめきを押し分けるように低くきこえていたバイオリンの曲が終つた。しばらくざわめきだけが続き、そのあとこんどはピアノ曲が流れてきた。リストの『ラ・カンパネラ』だった。青年はいいかわらず手を使わずに煙草をくわえ、庭を見ていた。啓子も黙り込んで庭のシクラメンを見やり、レコードの曲に耳を傾けた。そのうちに彼女は、レコードのテンポが少し早すぎるような気がしてきた。それはちょうど、三十三回転のレコードを四十五回転でかけているといった感じだった。もともと『ラ・カンパネラ』はテンポの早い曲だが、早いなりに感じられるはずの安定感がなく、聴いていると気持が前につんのめってしまうかのようにせわしなかった。「あなたは富山に住んでいるんですか」青年が啓子に顔を戻してたずねた。プロ

グラムの中の「吉沢啓子」の個所には、卒業論文のときの富山の大学の研究室名が主任教授の名とともに記されているのだった。「富山は私の郷里です。その大学を出たものですから」と啓子は答えた。「でもいまは仙台の大学にいます」「郷里が富山ですか。富山の市内ですか」青年はさらにきいた。「いいえ、駅からバスで三十分ばかり滑川の方に行ったところですよ」「富山には二度ばかり行ったことがありますよ、立山に登った帰りに」「私も立山にはいちど登ったことがありますわ」「あそこはいいですね」「ええ、いいですね」青年はコーヒ―茶碗を口に運んだ。「山にはよく行くんですか？」とこんどは啓子がたずねた。「かつてはよく行きました。ワンダーフォーゲル部に入っていたし、それに郷里が上田の近くなもんですから。でも最近ほとんど行ってません」青年は答えるとふたたび庭に目をやった。やがてせわしない感じの『ラ・カンパネラ』が激しい鍵音を響かせて終った。周囲のざわめきがまた甦り、啓子は青年と同じく庭を見やりながら、ふと初対面の青年と山の話などをしていて自分をおかしく思った。この一カ月、今日の発表に備えての実験で忙しかった。発表を無事終えたという、安堵とも虚脱感ともつかぬ思いが啓子の裡を領していた。初対面の青年とのこんな会話を不自然でなく感じさせているのもその感情のせいかも知れなかった。啓子は腕時計を見た。彼女は、大学を同期に卒業し、いま大塚の会社に勤めている野村義江と五時半に新宿で逢うことになっていた。今夜は恵比寿の野村義江のアパートに泊めて貰い、明日の朝仙台に帰るつもりだが、野村義江と落ち合う前に丸善で捜してみたい専門書があった。時計はすでに三時をまわっていた。彼女は紙袋とハンドバッグを手にとり、青年にいった。「私そろそろ失礼しなくてはなりません、ご質問はそのくらいでしうか」

ぼんやり庭を見ていた青年は、われに返ったようにあわてた仕種で煙草をもみ消し、「そうですね……。いえ、もうありません。お引きとめて申し訳ありませんでした」そして二人とも立ち上がり、出口の方に歩きかけたとき、青年が微笑を浮かべながらいった。「そうそう、吸水率の測定方法については、あなたの報告がたいへん参考になりましたよ。できればあなたのこれまでの論文をまとめて拝見したいですね」

二

仙台に帰ったあくる日、啓子は専門雑誌に発表した論文の別刷りと、卒業論文のコピーを青年にあてて送った。その一週間後に青年から礼状が届いた。そこにはまた疑問点も指摘されていて、それは啓子の合成したポリマーの推定構造式についての疑問だった。啓子は、自分の合成したポリマーの化学構造式を推定する際に、元素分析や核磁気共鳴などのほかに、特に赤外線吸収スペクトルの解析図を大きな依りどころにしたのだが、彼女が波数一二五〇のところに強く見られる波形を、ベンゼン環にメトキシル基のついたもののスペクトルであるとしたのを、青年は、これは副生物のベンゾール、つまりベンゼン環に水酸基のついたもののスペクトルではないか、できないとベンゾールの吸収スペクトルに共通している波数一三八〇あたりの中型のスペクトルが説明できない、といってきた。その点については啓子も確信が持てなかった。何しろ彼女の合成するポリマーは、単離精製が著しく困難で、ポリマーの中に副生物のベンゾールが残存していること

は充分に考えられた。啓子はそのことを青年にうち明け、もしかしたらあなたのいう通りかも知れない、と書き添えた。そんなことから啓子と青年とのあいだに文通がはじまった。半月にいちどぐらいの割で、互いの実験の進み具合、それに関する討論がほとんどだったが、啓子はしばしば青年から有益な助言を受けた。合成したポリマーを再沈澱精製するのにきわめてふさわしい溶媒と操作方法を教えて貰ったのがその例だった。啓子は、自分の合成するポリマーの再沈澱精製が、非常に手間がかかり、能率が悪いことに悩まされていた。ポリマーをいったん溶媒に溶かし、それに非溶媒を加えてふたたび析出させ、濾別するのだが、析出してくるポリマーはきまって固体ともエマルジョン（乳液）ともつかぬ、ロ状のもので、三百CCほどの量を濾過するのに、アスピレーター（吸引器）を使ってもまる一日かかるというスローペースだった。問題は、ポリマーをさらさらした固体として析出させてくれる溶媒と非溶媒の発見だった。普通はほんの数分で濾過できるものを、適当な溶媒系を見つけないことができないために彼女は手こずっていたのだが、ある日青年にあてた手紙の中で、たまたまそのことに触れたところ、青年は、非溶媒としてグロインではなく、それよりも沸点の低い石油エーテルを使うこと、そしてドライアイス・メタノール混合液中で零下二十度ほどに冷却しながら再沈澱させ、かつ吸引濾過してみてもどうか、自分はそのうやっている、と書いて寄こした。もともと青年の合成しているポリマーと啓子の合成しているポリマーとは同系列のものだった。彼女は青年から手紙を受けとった翌日、早速その方法で再沈澱精製を試みてみた。結果は予想外に快調だった。冷却しながら再沈澱させ、かつ吸引濾過させるので、ちょっとした装置の工夫が必要だったが、いちど装置を組み立ててしまうとポリ